Doctor's File
ドクターズ・ファイル

## 医療法人 鈴木歯科医院

# 鈴木俊夫院長

名鉄瀬戸線守山自衛隊前駅より徒歩２分の場所に位置する「鈴木歯科医院」。待合室には畳のスペースがあり、ゆったりと診療までの時間を過ごすことができる。鈴木俊夫院長は、1973年に愛知学院大学歯学部を卒業後、歯科口腔外科を中心に、多くの治療に携わってきた大ベテラン。数々の著書を出版したり、介護医療用品の開発にも関わったりと、その活動は多岐にわたる。明るく、会話が大好きだという鈴木先生からは、最期まで明るく楽しい人生を歩みたいという願いが伝わってくる。同院には、先代の頃から通う患者も多いそうだが、いつも前向きで話しやすい鈴木先生から励みを得ているのではないだろうか。長年歯科治療に携わる鈴木先生に、これまでの歩みや治療に対する思いを聞いた。
（取材日 2016年6月30日）

### 父に連れられて小学生時代から往診を手伝う

**―先生が歯科医師をめざしたのはどうしてですか？**

実は、それほど大きな理由はないんです。そもそも、私が生まれる前から父がこの地で歯科を開業していました。それで、経営者やサラリーマンよりも、歯科医師という仕事を身近に感じていたんだと思います。父は歯科医師として優秀な人でした。英語とドイツ語が堪能で、戦後当時、この地に駐留していたアメリカ兵の歯科治療も行っていました。さらに、高齢で当院に通えなくなってしまった患者さんの治療のために往診も始めていました。私も、小学生の頃から父に連れられて往診に行き、照明で口元を照らしたり、患者さんの体を支えたりという手伝いをしていましたね。りんごの箱を自転車にくくりつけて、往診用の機材を運んでいたのを覚えています。

**―昔と今の歯科治療では違いがありますか？**

私が開業した頃は、まだ歯科医院がほとんどありませんでした。ですので、朝9時から診療を開始し、終わるのは夜の12時くらいでした。患者さんがひっきりなしに来院するので、それくらいの時間がないと治療できなかったんです。現在は夜8時まで診療を行っていますが、周辺に歯科医院も増えたので、以前のように患者さんが外まで並ぶということはありません。症状としては、この20年で患者さんの虫歯率がかなり少なくなりました。今は、小学生でも、おおきなむし歯を見かけることはすくなくなりました。フッ素塗布や正しい歯磨き法が、子どもの頃からの習慣になってきているからではないでしょうか。当院の診療内容も、むし歯の予防、歯周疾患の治療など予防を中心にしたものや、ホワイトニングなどの審美的な内容になっています。

**―待合室に畳のスペースがあるのが興味深いですね。**

改装する前はもっと畳スペースが広かったんですよ。昔は待ち時間が相当長かったので、患者さんも夕食を持参していたんです。そして、待合室でおにぎりやご飯を食べながら待っていました。8畳くらいのスペースが良いんです。中には横になって寝ている人もいましたよ。改装後は診療室のスペースを広くしました。待合室はすべて畳にしたかったんですが、車いすの患者さんも時々お見えになるので、通路として一部、フローリングにしました。通路の幅も広めに設計しているので、電動車いすでも十分通れます。そとから、バリアフリーで、診療室まで入ることができ、車いすに座ったまま診療をうけることができるようにしました。また、目が不自由な方向けに、道路から診療室の入り口まで、これるようにし、スロープもつけてあります。

### 歯科・口腔外科の分野で数多くの症例を経験

**―来院される患者さんの年齢層はどのくらいですか？**

当院はお年寄りの患者さんが多いですね。お子さんは少なくなりました。この地域に子どもたちが少ないですからね。他でも同じようかと思いますが、お年寄りがお亡くなりになり、その家が取り

DATA

**医療法人 鈴木歯科医院**
〒463-0067 愛知県名古屋市守山区守山3-3-15
TEL：052-791-2875
守山自衛隊前駅 / 歯科 小児歯科 歯科口腔外科

ドクターズファイル で 検索

壊され駐車場やワンルームマンションが建っています。患者さんの年齢層が高いので、会話が多くなりますね。高齢になると、話が好きになりますから。もしかすると、治療時間よりも話している時間のほうが長いのではないかという患者さんもいます。でも、高齢者の一人暮らしは、会話する機会が少ないものです。会話をしないと言葉も忘れがちになるので、会話する場として当院を活用していただくのも良いかと思います。

**―口腔ケアとは何ですか?**

口腔ケアは、口腔内の状態を良くすることによって、口臭や歯周疾患を予防し、食べることや話すことをスムーズにできるようにする目的で行います。高齢者のQ.O.L.(生活の質)を向上させるために欠かせないケアですね。当院では、歯科衛生士が通院できなくなった方々に訪問してによる口腔ケアを担当し、患者はじめ介護しているご家族への指導も行います。患者さんの中には、認知症や脳梗塞の後遺症によりセルフケアが十分できない方が多く、一人ひとりに合わせたケアが必要になります。当院で本格的に訪問診療を始めたのは1980年ごろからですが、当時は訪問診療をする歯科医院も少なかったんです。それで、仲間の歯科医師たちでネットワークを作り、テレビや新聞にも取り上げてもらい、ようやく80年代後半に軌道に乗り始めました。

**―先生が専門にされているのはどの分野ですか?**

大学では歯科口腔外科を学んでおり、勤務医時代には他院の応援に向かうこともありました。口腔外科手術が必要になるケースとしては、交通事故やけんかによる口内の負傷が多かったです。とても多くの症状を目にしました。開院してからも月に1、2人は口内の骨折で来院する患者さんがおり、簡単な手術は当院で行っていました。注射や点滴を打つ必要があったので、当時は歯科衛生士よりも看護師に働いてもらっていました。こうした経験があるので、私は医師や看護師とも共通の土台で話ができるんです。たとえば、肝機能のデータを見ながら患者さんについて医師と話すことがあります。これは、歯科口腔外科を専門にしてきた私の強みです。

## スタッフが自分で考える力を身につけられるように指導

**―診療の中で印象に残っていることはありますか?**

往診をする中で、がんで亡くなられた患者さんを何人も見てきました。当院には、父の代から通ってくださっている患者さんがいます。中には60年以上当院を利用されている患者さんが何人もいますが、病気で通えなくなることがあります。それで往診に行くわけです。そうした患者さんを診療するときは、スキンシップを大切にしています。手を握ったり背中をさすったりしながら「早く元気になってうちにおいで」と。お亡くなりになるまで、時々うかがって、お別れをさせていただいています。先日、業務を終了しましたが、居宅介護支援事業所と訪問看護ステーションを動かしていました。2000年から、わずか16年でした。とても残念でした。いずれも当院の患者さんが主で、中には、大学時代の恩師と奥様を診させていただいたことは、恩返しができたと思っています。地域への恩返しも同じことです。

**―訪問するスタッフにはどのような指導をしていますか?**

「自分で考えて行動するように」と指導しています。最初は、患家へ私や先輩歯科衛生士と同道し、現場で、患者さんはじめ介護者と、どのような間合いをとって対応したらいいのか細かく指導します。当院では、歯科衛生士としての経験者しか採用していないので、技術てきなことはほどんど指導でません。間合いが重要なことです。いずれにしても、最終的には、自分一人で訪問することになります。患者さんは一人ひとり症状が異なるので、これをやっていれば大丈夫という処置はありません。自分の目で見て判断し、その場で行動する必要があります。当院のスタッフは、ベテランがそろっていますので、安心して任せています。

**―今後の展望を教えてください。**

父の代から数えると半世紀以上、守山で歯科医療を続けてきました。私も息子たちも地元で生まれ育ちました。歯科医療を通して恩返しがしたいと思っています。開業の傍ら、大学人として、またケアマネージャーの指導者として教育に従事しています。いつも、患者さんに真摯な気持ちで向き合い、その人の人生に少しでも花が咲いているような楽しい生き方をし、軟着陸で人生の最期を迎えたいと思っています。私の持論ですが、楽しく生きがいのある人生を送るには、おいしく食べ、よく寝て、心ときめく人がいてこそ、素敵な人生を送ることができるのではないかと思っています。何歳になっても、人を好きになる気持ちを忘れないでいてもらいたいですね。

ドクターズ・ファイル
スマートフォン版

「イマチカ検索」で
今から診てもらえる
近くの医院・病院をボタン1つで検索!

©2004-2016 Denentoshi.com Co.,Ltd., Gimic Co.,Ltd. All Rights Reserved